

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 205号

2019年5月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より (5)

### 第5講 夏休み中の3大発見

#### 日本の仏教、浄土門が旧約

内村鑑三先生が、福音の理解は、既に日本の仏教、浄土門が旧約であると見てよろしい、実に日本の仏教浄土門が、すなわちこの福音を証明していると見ていいと、おっしゃいました。

私は、この信ずるということを理解するのに、我々先輩の浄土門の祖師方、あるいは善導、源信、源空（法然）という方々がおっしゃたことは、非常に注意する必要がある。

善導大師は、信ずるという字を取ってしまって、「まさに知るべし、称名する者は極楽へ行くことを」と言われた。だから「知るべし」、「知る」と言われた。だから、「知る」という字がいいか。もう一つは、「受ける」という字がいいかしらん。「receive」、この字がいいかも知らん。

そうですから、要するに私は、もうキリストで完全だ。我々は信仰、行ない、何一つプラスする必要はないということが、このキリストの「贖いとなりたもうた」という、この文句によって一層、コリント前書 1 章 30 節の意味が明らかになった。これが第 1 点。

(注)コリント前書 1 章 30 節「あなたがたはキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。」

称名は悲しい時、苦しい時だけでよろしい

ロマ書 10 章 13 節「主の名を呼び求める者はすべて救われるべしとあるからである。」

この 13 節には、何遍言ったら救われるということは書いていない。一遍でもいいんだと、私はそう言った。

まさに、これは一遍でよろしい。数は書いていない。称えれば救われると書いてあるから、これは「How often」ということは書いていない。これは我々みたいな俗物は悲しいとか苦しいときだけにしか出てこない。

そうですから、悲しい時、苦しい時だけでよろしい。我々は死ぬまで、悲しいとき、苦しいだけで「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と言ったら、必ずキリストは迎えに来る。そういうことが分かった。

これはエペソ書を学んでいる時に、こういうことが分かったということは誠にありがたい。エペソ書の 3 章 8 節には、「無尽蔵のイエス・キリストの富」という有名な字が出てくる。

親鸞は、「願力無窮にましませば散乱放逸もすたらず」と言った。救いは贖いの力にある。ストレプトマイシンにある。

## 第6講 お彼岸中に示された一つの大発見

### 信ずるという表現はいろいろあるが

「発見」とか「大」とか申しましても、私はキリスト教の学問につきましても非常に無学でありますので、既に2000年の歴史において学者たちが申しておられる、もう既に、こういうことをはっきり文章になって申しておられるということがあるかもしれません。そうですから、そういう場合には、私の無学、無知のためでありますのでお許しを願いたいと思います。

端的に申しますと、「信ずる」、「イエスを信ずる」、また、「イエスの救いを信ずる」、あるいは、「イエスを神の子と信じる」、あるいは、「神の義を信じる」、あるいは「神の愛を信ずる」、「神は愛なりと信ずる」、こういうふうに「信ずる」ということはたくさん聖書に出てきますが、これはみんな内容は同じことなのです。

これは、「神の義を信ずる」と同じでありまして、「イエス・キリストの贖いを信じる」ということです。言葉はいろいろになっておりますけれども、聖書にヨハネ伝あるいはロマ書、いろいろ字は変わっておりますけれども、内容は同じことです。「イエスの贖いを信じる」ということです。 これをはっきり知っておく必要がある。

## イエスの贖いを信ずることと称名は同じこと

そうですから、聖書に「イエスを信じる」、あるいは「イエスを神の子と信ずる」、あるいは「イエスの救いを信ずる」、あるいは「神は愛なりと信ずる」と言ったら、その内容は、神がイエスをこの世に遣わして、そして我々の罪とがを贖って、我々に永遠の命を与えてくださったという、その贖いを信ずることを言う。これを、はっきり知っておく必要がある。何十年、教会へ来ていても解らない人が多い。

それから私は今日の発見というものは、「贖いを信ずること」と、「イエスの名を呼ぶこと」とが同じであるということが分かった。「イエスを救い主と信ずること」とそれから「わが主イエスよ」と称えることが、同じであることが分かった。

その根拠として 3 つ挙げます。これが「イエスの贖いを信ずること」と、「イエスの名前を称えること」、「わが主イエスよと称えること」は同じであることが分かったということが、これがこの彼岸中の大発見なのです。

## 第 1 の理由 聖書の明文の根拠

これはロマ書 10 章の 11 節から 13 節についての私の講解が書いてありますが、これは由来、キリスト教信仰というものは聖書の文句による。聖書の文句に明らかな根拠がなければ、それはキリスト教信仰とは言わない。キリスト教信仰というものは、聖書の明文にはっきりした根拠が必要になる。

ロマ書 10 章 11, 12 節「聖書は『すべて彼を信じる者は失望に終わることはない』と言っている。ユダヤ人とギリシャ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。』…

この 12 節には、「恵んで下さるからである」という「から」という字が書いてありますが、原語ではこの 12 節の初めに「その訳は」という字、英語でいう「for」という字があるんです。…

だから、この 11 節、12 節をよく読めば、彼を呼び求めると言う称名、彼を呼び求めるということが彼を信ずるということと同じ意味であるということがこの文章からはっきりわかる。

これが、私が「贖いの信仰」と、「イエス・キリストの名を呼ぶ」のは同じであるという根拠の一つ。

## 第 2 の理由 3 章 22 節の前置詞

第 2 の理由、これもロマ書の本文から。3 章 22 節とこの 10 章 12 節とは、3 章 22 節の方は、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである」。神の義というのは「贖い」です。「贖い」というものが、信ずる者に与えられると。

原語は「与えられる」という動詞はありません。これは、「信ずる者の方に」という前置詞なんです。英語の「for」は、「その方に」という字なんです。そうですから、その「神の義」というものは、信ずるすべての人に向かっているという字なんです。そうですから、3 章 22 節は、ここは信ずる人に、すべて信ずる人に向かっているとなっている。

## 10章 12節の前置詞

それから、10章 12節の方は、彼を呼び求めるすべての人に、「恵んでくださる」という動詞になっていますけれども、これも原語は「向かっている」という字なんです。3章 22節と全く同じ前置詞。そうですから、これはすなわちイエス・キリストの恵み、恵みというのは贖いです。神の義と一緒に、贖いと一緒にです。贖いが彼を呼び求める方に向かっている。その方に向かっているという原語の前置詞は、その向かっているという字と、その向かっている中へずっと入って行くという意味がある。

原語の前置詞では、その方に向かっているというのが、その方へずっと入って行くということになる。そうですから、3章 22節の神の義は、贖いは、すべて信ずる人に向かつてその方へずっと入って行く。だから、この訳は「与えられる」と訳している。



### 3章 22節と 10章 12節は同じ言葉

10章 12節は、豊かに恵んで下さると書いてある。これは神の恵みが、イエスの贖いが、彼を呼び求める人にずっと向かって、その中へ入って行くという、全く同じ言葉。3章 22節と 10章の 12節は全く同じ言葉です。

そうですから、全く同じだ。パウロは、信ずるということと彼の名を呼ぶということは、全く同じ意味に解している。この期間にこれが分かった。

### 第3の理由 信ずる(心の状態)よりも称名の方が優れている

第3の理由。「信ずる」ということは心の状態でしょう。信じて、贖いを信ずるとか、自分は罪人であると、万人すべては罪人であると信じるとか、あるいは神の子とせられたと信じるとか、復活を望むということは心の状態です。この心の状態、信ずるということ、すなわちロマ書8章までに書かれたことは心の状態なんです。この心の状態は、我々は怒り、悩み、それから心の乱れている時には、この信仰と我々の心の乱れとは共存しない。

よろしいか。我々の心が乱れているときは、信仰の望みというのはもうない。我々は危ない。信仰を望むだけに頼っていては、いつなくなるか分からない、いつも隠れている。

ところが、称名、名を呼ぶということは、心の乱れと共存しうる。恵心僧都は、「妄念のうちより称名せよ」と言った。

私は、この意味において、同じであるというよりも、信仰より称名の方が優れていると信ずる。なぜかというと、乱れた心と共存しうる。信仰、望みは、乱れた心と共存し得ない。

これ、以上3つが、私の称名と信仰と同じであるという根拠です。